

## 表紙のことば

### 題名「衝突の奇跡」

阪川 武志

この作品は、写真用の黒白印画紙と現像処理に使う現像液の衝突によって生れたものである。

感光面全面に均一露光した（かぶらせた）RCタイプ印画紙の感光面に現像液を高速（手作業）に飛ばし、衝突の瞬間におきた現像液の感光層への侵入により、急速に現像が始まる。次の瞬間に現像を停止して、定着、水洗、乾燥した。

印画紙を処理用バット内に置き、筆先を解した書道用の丸筆に現像液を含め、40 cmほど上から筆先で突くように勢いよく印画紙面に飛ばす。瞬間的に現像が始まるので、適度と考えたときに現像停止液を使って瞬間的に現像を打ち切る。

現像液の飛ばし方によって、現れる画像が多様になり、結果の推定ができず、やってみないとわからない面白さがある。同じ画像の反復再現はできない。たくさん創った画像から選び出して作品を構成した。

### 「ケミグラム」(CHEMIGRAM) について

河野 邦彦

阪川武志教授の作品の技法は、「ケミグラム」という技法の一種と言えよう。

「ケミグラム」は、ベルギーの写真家ピエール・コルディエ氏が考案した化学的処理法である。写真の世界でも、「フォトグラム」ほど知られてはいない。「ケミグラム」を定義すれば、感光材料上で化学物質（現像液、定着液）が部分的に作用することで作られる写真画像あるいはその処理技法である。カメラ、引伸し機、暗室は使わない。従来の写真概念からすると理解が困難かもしれないが、新しい写真の創造的世界と言えるだろう。

「ケミグラム」は制作者によって種々の手法、ヴァリエーションの開発が可能である。以前、コルディエ氏の「ケミグラム」作品の展覧会が本校の写大ギャラリーで開催された際、氏による「ケミグラム」のワークショップが行なわれ、種々の技法が紹介されたが、展示作品の中にも、紹介された技法の中にも、阪川教授の作品の技法は見当たらなかった。この作品は、“スパター・アンド・ドリップ”（跳ね飛ばし、滴らせる）とでも言うような、「ケミグラム」としてはシンプルながらユニークな技法が用いられており、予測を超えた、ある種偶然の産物としての抽象的で不思議な世界を作っている。写真化学を専門分野とする阪川教授ならではの作品と言えるだろう。